

第三章 民俗

第一節 年中行事

(一) 正月の行事

元日 朝早く若水を汲み、湯にわかして茶や梅湯を飲む。年のはじめの日から、若返って働かれるようとの願いである。この水を汲むとき、「何汲山、よね汲山、黄金の柄杓で長者の水を汲む」と、健康と富貴の願望である。

妻は食事の用意などせず、「嬬正月」といって主として男が炊事をする。

若水は男が汲む(柳津)。朝食をすまして、年賀に歩く(地区全戸)。午前零時太鼓を打つと参詣に出かける。

元日参り 虚空蔵様にお参りをし、「御籤」をひいて今年の運命を占う。

六区からは、年始のため円蔵寺に参り御用帳をし、終わって円蔵寺で年賀の宴を催し、座席は年齢順とする。年始者はこのとき、次々にめぐりくる十二支の大盃の酒を飲み廻しする。また各集落では、村の鎮守に参拝する。

正月二日 「買い初め」として、朝うす暗い中から戸をあけて売り始める。一番先に来た人には、たくさん景品がつく。近頃は、初荷といって、旗をたてて御屋が店々におろしていく。

また「仕事のしそめ」として、馬の道具、田植時の用具などをつくる。

また山神参りをする。山しめとして、藁を束ねその間に、餅、麻糸、門松、田作などはさみ、帰りに若木を男の数ほど切ってきて、雪の上にたてる(西山)。

正月三日 「不成日」といって、他の家への訪問などをしないで、家にいる。

また「トロロメシ」を食べる。寿命の長くなるようにとの信仰である。

正月四日 この日は、虚空蔵様の御用帳日で、参詣者が多い。今年の福満を祈願するものである。

また若夫婦は、正月礼に生家へゆく。

正月七日 虚空蔵様の七日堂といって、裸参りをする。夜半十二時の鐘の合図で、各坊、宿屋などから、禪一つに鉢巻をして堂内にかけ集まり、「ワッショイ」「ワッショイ」と掛声をかけて菊光堂内で練り、鰐口の綱登りをして、はやく梁の上にと幸運になれるという。やがて堂外に出て、肉弾うちあうと、屋根上から三百六十五本のゴウをまくと、それを奪い合う勇壮な争奪戦がされる。このゴウを拾うと、一年間無病息災で、幸運が返ってくるという。この

日は、屋台店なども出る「おひち」となり、この夜は遅くまで賑やかさが続く、この行事は古い伝統を持つ奇祭なのである。

「七草」も行う。男女七歳になった子供は、盛装してお寺や神社に参詣して、今後の成長を予祝する。

正月十四日 「鳥追い」をする。夜明けころ、集落の子供集団が、

「雀の頭八ツにわって蚕俵さつめこんで、佐渡ヶ島さーホイヤーホイ」などと唱え、集落毎に衝突することもある。

「団子挿」をする。みづきの木に団子をさして、茶の間に飾る。

農家は五穀豊作を、商家は商売繁昌を祈るナス・キュウリ・里芋の形や大判小判の形もさすのはそのためである。小枝の団子は、便所や炊事場などにもさす。

正月十五日 朝はやく「鳥追い」をする。雪中に鳥小屋をたてそこへ集まり、唱えをする（西山）。また夜「災の神」をする。この日、子供や青年が総員で山から高い木を切り出し、その木に藁・なつとうつと御棚神・御幣・お札・門松・縄などをしぼりつけ、夕方に点火する。この火焰の方向によって、本年の作柄を予想する。またこの火で餅を焼いて食べると「病気をしないとか、この日で煙草を飲むと歯の痛みがなくなる」という。

この日、厄年の男女と花嫁花婿は献酒をすると、青年はこれによって慰安する。このころ、「女の正月」または「望の正月」といって休む。柳津の女の正月と同じく西山は十五・十六日の両日に女の正月を行う（西山）。

中野では古くからこの日に、藁で人形二体をつくる。男女各一体づつである。しかも性器をつけるのである。これはサイノカミで焼くところを見ると、道祖神の御神体としたものであろう。サイノカミが災の神と同語であることによる。わが町ではこの珍しい災の神は長く続けてきた。現在は行わない。

なお鳥追いのとき、童歌のような唱え呪文がある。

「今日は誰が鳥追いだ。長者様の鳥追いだ。さらばさつと追いましょう。雀の頭八ツに割って、蚕俵におしこんで、鬼ヶ島（佐渡ヶ島）にホイホイ」。

子供は朝はやくからはしゃぐ日である。

道具の年取 農家で使う鍬・鎌・馬鍬・鉈・鋸（天王寺）・算盤などを床の間に揃えてまつり、神酒を捧げて、くる農作の豊年を祈願し、予祝するもので、農家として重要な行事である。

正月二十三日 二十三夜様として、夜は「豆腐を食う。正月・五月・七月・十一月は、四節の三夜様といって、特別に重んじて、お祭をした。「月待」のことである。

正月二十五日 文殊講をする。子供が宿の家に集まり、昼食をたべて一日遊んで帰る。この日宿の家では、いろいろ御馳走する（西山）。

年 祝 正月中の吉日に年祝をする。男は四十二歳、六十一歳、女は三十三歳になると、親友・親類の人をよび厄払として宴を開く（西山）。

(二) 二月の行事

二月初午 二月初午の日、稻荷神社や屋敷稻荷の祭りをする。赤飯と豆煎を供える。これは、農耕馬の健康を調べ、近く来る春耕の準備として考えた。一部で、「初午講」をすることもある。

また、百万遍も各家を廻って行う（西山）。

節分 二月初旬ころの二十四節の一つで、この夜に「豆播き」を行う。夕方になると、豆殻の根本を削ったものに、田作の頭をさして、唾をかけながら焼く。これを「ヤツカガシ」（ヤイカガシのこと）といって、玄関やそのほか窓などへさす。そして大豆をよくいったものを、一升枀に入れて神棚に供え、家内中お祈りのあと、いつもよりおいしい夕食をとる。おわると、男の子が枀を神棚からおろして、大声で唱えごとをして、大神宮からまきはじめる。

このときの唱えごとは、「鬼は外、福は内、恵美須大黒豆あがれ」とか、あとの文句を「鬼の目玉かつぶせ」と唱えながら、家の各部屋・小舎・土蔵などにまいて歩く。

終わると、豆を自分の年ほど拾って食べたり、十二粒を月にたえて、炉に並べて焼いて、その変化によって、農作物の豊凶や、天候を予言したりする。豆をまいた子供は、御祝儀として、いくらかのお金を貰う。

これは、春と冬の季節の分れ目なので追儚（おひな）ともいって、来る春も災厄を払って、しあわせな年にしたいとの祈りであり願望であった。素朴な民俗の楽しい行事である。

二月十五日 「涅槃会（ねはんえ）」で、お釈迦様の御命日である。寺にかけ

た「涅槃図」をおがむため、寺参りをする人が多い。「釈迦団子」をあげる（西山）。

(三) 三月の行事

三月三日 「ひな祭り」といって、女の子は「ひな壇」を作って「ひな」を飾り、男の子は「天神様」を飾って、成長を祝う。そして菱餅や甘酒を供える。初節供には近親者を招く。また嫁や婿は、節供礼といって、餅などのおみやげを持参する。

三月十五日 ほうそう神の祭りで、法印が廻拜をして、大般若会の赤札を配る。この日「オカラク」をつくって神々にあげてお詣りをする。このころ旧二月十五日となり、山ノ神講をする。男子が宿の家に集まり、米五合と一〇〇円を出して、ご馳走をつくり神を祭ったあと、酒食を共にして楽しむ。

三月二十四日 春の地藏祭で赤飯を供えたり、大きな幢（たて）などをたてる。春祭ともいう。

また、彼岸中日に御詠歌（西国三十三札所の）を近所の女に詠みあげてもらい、先祖の供養とする。

三月中 このころ春神楽がくる。社壇をかつぎ七・八人一組で、賑やかな囃子に乗って、獅子舞・おかめ・曲芸などを上手にやって、冬からさめた人々をよろこばせる。悪魔ばらいの伊勢神楽系である。夜は「ヨセ」といって、神社や寺の前で、長獅子・万歳なども行って、その集落の人たちを楽しませた。

(四) 四月の行事

四月八日 お釈迦様の御誕生日で寺参りをする。寺では、甘茶をつくって参詣の人に御馳走する。また薬師様のお祭り、馬頭観音のお祭り、馬のたくさんいるところは、「馬とばし」(競馬)などもする。「釈迦団子」をあげる(西山)。

(五) 五月の行事

五月五日 「端午の節供」で五節供の一つである。軒に菖蒲と蓬をさし、菖蒲湯に入る。この湯に入ると、男は健康になり、女は「蛇の子」を産まないという俗信もある。「蛇」は「邪」で、よこしまなことを除き幸になるという。

また、笹巻・ちまきなどを「キナコ」で食べたり、人に贈ったりする。

男の子のある家は、「幟祝」として、鐘馗、神功皇后と武内宿弥、金時の絵に家紋などを染めた幟をたてて、また「鯉幟」などをたて、子供の出世を祝った。

馬具洗い 田植が盛んに行われるころである。終わると家母で「馬鍬洗祝」として、馬具に青苗を添えて飾り、田植終わりをよろこび豊年を祈った。これを「サナブリ」(サノポリ)で、「田ノ神」を山へお送りする神事である。集落全員が鎮守に集まり、「ムラサナブリ」をするところも多い。

七月十三日「サナブリ」をする(西山)。

(六) 六月の行事

六月一日 「ムケノツイタケ」という。更衣のことで、この日から夏着になることである。季節の変わり目に非常に敏感であったことがわかる。

六月晦日には、鎮守に集まり大祓をする。正月から半年間の心と体の穢をはらうのである。

(七) 七月の行事

七月一日 「泣きの朔日」という。冬木沢の阿弥陀堂へ新仏の供養に参詣し、その周辺にいる「イタコ」(オワカサマ)に、精霊を呼出して貰って、対話をなし、追憶にふけて泣いてきたためである。新仏でも、死後百ヶ日を経ているときは翌年参詣とする。

七月初旬 「半夏」という。畑作の種子時をする目あてとした。

慶徳の稲荷神社では、御田植祭が催されるので、参拝にゆく(大正初めまで)。

七月七日 「七夕祭」でこれは、星祭である。秋の月祭と対象的である。青竹に短冊に歌や句など書いて、家の前にたてる。「索牛星と彦星」のロマンチックな伝説も語り伝えられてきた。暑い日なので、夕涼みの楽しい行事である。

六日の夕方に「七夕」をつくり、七日に只見川や近くの川に「流し送り」する。川に遠いところでは、畑や田にたてて、「カカシ」のかわりとする。

墓参り このころ「お墓参り」として、親をなくした人は、実家に来て墓参りをする。花や西瓜や団子、塔姿(カカンジョウ)と線

香・お茶を供える。

虫送り 「土用入の日」虫送りをする。青萱で作った虫籠に害虫を入れ、天下泰平・悪虫送りの旗などをたて、花を飾って、「稲ノ虫送ンゾー」と唱えて村を回り、のちに川へ捨てる。害虫の霊の慰霊と、豊作祈願の行事である。

丑の日 十八日間の夏の土用のうち、丑の日には、牛肉、ウナギ、ドジョウなどを食べる。夏バテの体力を回復させるために、脂肪の多い肉を食べる。「ウ」のついた「ウドン」などもよいという。

また「丑の湯」と称して、この日薬湯が出るとて、多くの人が入浴するのは、古い慣習である。

孟蘭盆会 十三日から十七日までの五日間の行事である。十三日に盆棚を作る。

青萱の門に「ワカメ」をさげ、香花を供える。この日、朝早く門火をたいて、御霊を迎えるところもある。十四日から、いつもとちがった御馳走をつくり供える。

お盆とは、肉体を離れて西方浄土の精霊を家に迎えて祭り、仏と共に食して、生者の霊を元気づけるという信仰もあった。十六日の屋食が終わると、祖霊を茄子馬と共に食べ物などを添えて送る。

盆踊り 十四日から四晩位を各地区の青年男女を中心として、夜遅くまで踊りふけた。櫓をたてて、その上には、太鼓・笛のお囃子と、音頭取の盆唄にあわせ、踊子は掛声をかける賑やかさであった。俗衣姿の優雅な踊りは、仏供養の念仏踊りから発展変化したも

のである。郷戸地区の盆踊りは、いまでもその伝統を守りつづけている貴重な芸能である。

明月 お明月様といい、豆明月ともいう。満月の夜に月見をする。縁側に小机を出し、その上に薄を飾り、十五団子と十五種類のくさぐさの菜果をあげて、清明の月を家族みんなで見賞する。このとき青豆は必ず供える。これは美的情操を養う人間形成上の上に大事な行事なのである。

会津巡り この頃になると、婦人はグループを組み、会津三十三観音巡拝をする。戦前までは、子を背負い草鞋ばきで、一週間も費して旅をした。これは、婦人のレクリエーションでもあった。

(八) 八月の行事

八朔 八月朔日なので「八朔」という。近く来る二百十日の無事を祈る「風神祭」であり、また八朔贈答の日であり、農休の稲刈への準備の折目でもあった。このころ八朔柿が実るのである。

明月 十五日の夜の望月に枝豆（青豆）と、その他の野菜・団子など十五種類を伝える。ススキも添えて、秋空の清澄な月を自然の美しさに融けこむ美しい行事である。

(九) 九月の行事

二百十日 立春から二百十日目にあたる。わが国は、古くからこのころ暴風雨に襲われ、農作物・山林・住居に多大の損害をこうむっていた。

そのため風神の荒魂を鎮めまつるため、神社に参拝して無事を祈

念した。

稲刈 今は早生種の植付は、十パーセントに達しているが、昔は中稲晩稲が多かった。農家は朝早く、夜遅くまで取入に専念し、稲の取入がおわると「ムシロバタキ」で御馳走を食べて、田の仕事の終わりとする。そして畑物の取入や貯蔵などに、十一月中旬まで多忙が続く。

九月節供 九月九日（ハシメノセック）十九日（ナカノセック）二十九日（シマイノセック）と三節供がある。このうち一回を鎮守の祭として祝う。

九月堂 八月末日の夜に、善男善女の信者は、虚空蔵堂に参籠して徹夜をする。この祭は、柳津三大祭の一つである。翌朝柳津町では、各戸会津念仏が供養として打あげをする。祭りの状況は、観光の章でくわしく記す。

センドウモーシ 九月九日夜、黒沢で行う。砂子原の「松明打」とおなじであるが、打ちあうことはしない。

明 月 九月十三日を芋明月という。この夜、八月と全じ飾りをして、里芋の小芋をきれいにしてお供える。

奇祭・松明打ちあい 砂子原では、中の節供の夜、鎮守熊野神社前広場に災ノ神に似たものをつくり、ここに氏子がたくさん集まって、「松明打ちあい」をする。若い嫁、婿などは総攻めの松明の火に逃げまどう（砂子原）。

(二) 十月（神無月）の行事

恵美須講 二十日の夜に恵比須神を祭る。商家が中心で、農家も富貴を運んでくるというので、鮭の切味などを供えてまつる。

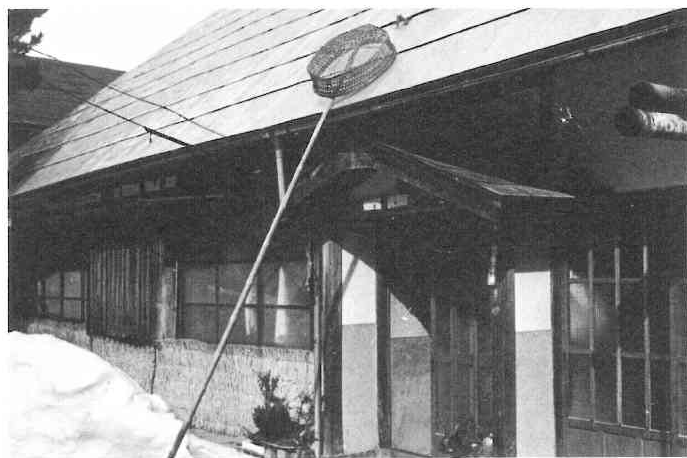
神送り 本月は、八百万神が出雲に集会すると古くから信じていたので、朔日の朝、餅をつき鎮守の神に供えて、神送りをした。出雲では、若い人たちの縁結びを定めてくるという伝承がある。

(二) 十一月の行事

初通しかけ 八日の夕方、屋根の軒先に、長い棒に初通しをつけてたてる。これは農事終わりの稲作儀礼である。

これにも面白い伝承がある。

主婦は冬季間に食べる野菜漬に専念する。これによって、各家の独特の風味をつけることになる。これが雪だけまでの大切な食糧となる。保存食として永い年月の生活の智慧が



初通しと稲作儀礼

刻みこまれる。

(三) 十二月の行事

川浸れ餅 朔日の早朝に、川浸れ餅^{かわひた}を食べて、そのうちから、一と二個をまるめて川に流し水神に供えよ。家族の水難を守ることと、灌漑用水・飲用水の不足のないように祈った、自然信仰の名残りである。いろいろな伝承がある。

大黒の年取 九日の夜に大黒天を祭る。ふだんより御馳走を多く作って、神に供える。福の授かることを祈る。

煤掃き 会津一円は二十四日が煤^{すす}払いであった。今でもこの伝統を守っている家もある。このころまで、どこの家でもおわる。神を迎える清浄な家と心にしたのである。

二十七日は、「煤の年とり」として、餅をついて、神や持仏堂へ捧げる。

寒入り 大寒入りの日は、油揚げを食べる。寒気に向かうので、脂肪をとる。湯豆腐など食べる人も多い。

このとき、二肢大根を供える人もある。これも伝承がある。

恵美須様の年取 十五日がその日で、前記と同じである。

「万改帳には、「十五日は夷の年越とし、夕飯に糧を入れず」とある。白飯（エイメン）を食べた。

冬至南瓜 冬至の日に食べる。寒さを凌ぐために暖かい南瓜を食べ、体を温めるのである。

またこの季節を越すと、南瓜の栄養、特にビタミンの含有率が低

下するということで、科学的にみて、生活の智慧は驚くべきである。

節餅 暮の二十八日の朝つく。いつもより多くついて、正月の神棚に供える「棚餅」とする。

歳暮 常に恩をうけたり、世話になった人に感謝をするため品物などを贈る。昔は、塩鮭・山鳥・雉子^きなどを心から贈った。

暮勘定 年間の差引をすることで、お盆勘定と暮勘定は、貸借の精算確認をしたのである。

大枝 六月晦日の大枝とともに、年二回の御祓で、下半期の罅障をはらって、清浄な心身で正月を迎え、新しい年への希望であった。

節買 暮に特別な買物のためにこの言葉がある。このときは、正月用品で塩鮭・数の子・海老・昆布・田作・手拭・足袋・蠟燭・反物などで、晦日の年越には、「ザクザク煮」を食べることが風習である。

第二節 民間信仰

一、山ノ神講 (大字藤)

山ノ神は、山村のみならず農村でも広く行われていた。その同信仰者は講を結び、年二回祭典を行っていた。しかしすでに廃れて、その状況を知るに容易でないが、わが町の藤にその形式が現在保存

されているので、その状況を記しておく。

開始年代の考察 古くから山ノ神信仰はあったが、講を結んだのは天明のころの一七八〇年代という。山林従事者の製炭業者・樵工・大工等は特に山ノ神を篤信して、共同祭祀として講を開き、親睦と慰安の行事とした。

祭 日 春・旧二月十二日

秋・旧九月十二日

講 元 順番を予め定めその順による。

持寄品 モチ米一升・ウル米五合（昔は酒を醸造した）。

饗応肴 講元中心で打合わせた料理とする。春秋によって異なる。

経 費 講宿元と個人で半分づつ負担する。

行 事 当日は早朝から宿元に集まり、唯一の慰安日として、朝風呂を沸かして入浴し、山ノ神の「神像図」か、「大山祇神」の掛軸に恭しく礼拝する。そして御神酒・餅を供え、山幸に対する感謝と今後の加護を祈念する。この神事が終わると慰労慰安の会（レクリエーション）として、酒宴を賑やかにし、昼食には餅を食べる。午後三時頃まで更に雑談などして過ごし、午後五時頃から再び酒宴に移り、飲めや歌えの大騒ぎをして、午後九時ころ和気あいあいのうちに散会する。このとき次の当番宿元を確認しあう。

山ノ神信仰は、野沢組に藤が入っていたのでその影響もあり、また藤目疆会という自主団体が、地域振興に非常に努力していたのであろう。わが町内全域にこの行事のあったことはいまでもない。

二、観 音 講

観音信仰者が集落毎に年一〜二回参集して、講を設けることがある。この方法や内容は、その地その地の個性や慣習によって必ずしも同一ではないが、ここでは郷戸地区のものを記しておく。

日 時 毎年八月十九日（お盆終わって）夜八時集合。

参集者 婦人会員

会の内容 信仰仏観世音の掛軸を掲げ、灯明をつけ、香を焚き仏への憧憬のムードをつくる。婦人会長は、清酒一升と団子を仏前に供える。会員は一同拝礼して祈願する。祈る心は、健康で明るく働き家庭平和にし、子供が立派に成育するための御加護を祈念する。礼拝が終わると、御供酒を載きそれがすむと、供えた団子と各自持参の重詰を開いて、子供のこと、家庭のこと、社会のこと、集落のこと、その他種々の話し合いをする。

。このとき行われている郷戸盆踊りの参加についても話し合い、仮装とか参加者数などを語り合い、親睦を高める。

。このときの食べ物は、枝豆・西瓜・菓子・煮物（カボチャ）・テンプラ（精進料理なので魚は使わない）。

。終って参会する。次の会場を確認しあう。

三、天 神 講

天神様、すなわち菅原道真を敬いあがめる心のある子供が、宿と

定めた家に集まり、天神像の掛軸か、三月節供に飾った会津天神像を祭って、みんなで参拝する。体を丈夫にして、道真のような美しい心と学問にはげんでよい人になるようにと、天神に肖あなまって子供たちが集まって、一つは神事、一つは娯楽と親睦を固めるための講である。大人の男子は山ノ神講、女子は観音講、寄合講などに比するものである。各集落に行われていたが、すでに廃止されたところも多いが、小ノ川地区や西山地区にあわせて二、三がようやく続いているくらいである。

小ノ川天神講を記すこと。

。十二月二十五日午前十一時ころまで、輪番で定められた宿元に集合する。

。このとき子供一人で、米一合。現金二〇〇円（昭和四十九年まで一〇〇円）を持ち寄り宿元へ出す。

。宿元では主婦が家の掃除をし、炬燵を暖かくして、天神の掛図をかけ、そこへお菓子・野菜・魚などを供えて待つ。

。料理は宿元的主婦が、一切責任をもって作る。このとき多人数の子供なので、宿元の近所的主婦も二、三人が手伝いに行つて手伝う。

。子供全員が集合終わると、灯明をつけて年長者（小六）が中心となって、天神様に参詣する。

。このころ中食の仕度も整えられ、席について楽しく食べる。

。少憩すると、男はカルタ・腕相撲・雪ダルマ作り、女はお手玉（ヘホツキ）・アヤトリなどをし、また唱歌や流行歌などを独唱したり、

斉唱したりして、夕方まで遊び過ごす。

。日脚ひあきのはやいこのごろなので、午後五時ころには夕飯をみんなで食べる。

。夕飯がすむと、みんなでまた一遊びして、炬燵に菊の花のように寝る。足喧嘩、布団の引っぱりくら、いたずらしいなど子供たちの無邪気な一夜を過ごす。

。朝六時ころ目をさました子供たちは、宿元に御礼のあいさつをして我家に帰り、洗顔して朝食をとる。これで終わる。

。宿元では主婦が、地区の子供の楽しい行事なので（それも年一回）損得を超越して、真心こめた料理でご馳走している。ここで来年の宿元などを確認しあうこともある。

こうした行事が、信仰心を養おうと、親たちは素朴な子供の講を守っているのである。すべての民俗行事が、年々すたれようとするとき、子供の躰の上からも、幼いころの想い出としてぜひ続けてゆくべきである。

四、厄年

厄年は、はじめのおこりは、役年やくねんと称し日本固有の心の支えであった。地区内の連帯感を強め、共存共栄を願うには、地区の行事、特に祭を大切にしなければならなかった。従つて年齢によって、地区の役目を分担したのである。例えば祭の稚児は七歳。御興渡御奉仕は二十五歳、実質的な事務を司る人が四十二歳、因習保持者の願

問役が六十一歳などと考えていた。こうして、この年に成長した人々は、責任を果たすよう健康にも留意して、張り切って生きてきた。地区のその他の行事にもこうした分担があった。それが陰陽学や仏教の普及によって、我々は罪多きもの（業を負う）との信仰が育ってくる、役年は厄年と同音の字におきかえられた。そして、男は十六歳、二十五歳、四十一歳、四十九歳、六十一歳などが、厄がふりかかると思い、一方では恐れさえ感じるようになり、「厄払い」などと、神仏の参詣をする人もできて来た。女は十九歳、三十三歳、が大厄などと教えられ、とくに九の人は苦と同音のため、一年間の苦悩が襲いかかるものと思い、「苦払い」さえも行う人ができた。「前厄」・「本厄」・「後厄」などだんだん複雑化してきた。

とに角、七歳、十五歳、十九歳、三十三歳、四十二歳、六十一歳などは、生理的な変化があり、人生として折目をつける年ごろなのである。このころ自分なりのいろいろな面で、慎重に行動する心掛けなどは、あながち意味のないことではないが、それに自分の心が支配されるということまでゆくことは、考えねばならない。三十三歳が「サンザンな目」にあうとか、四十二歳は「死ニ」年だとかなどは、ゆきすぎではなからうか。櫛「苦死」を拾うときは、三度足でふみつけて拾うなどは、少しおかしさを感じるようである。

要は厄年な役年で、地域社会構成の重要なポイントを担任する希望と熱情を持つべき年と思う。

五、守り本尊

人が生まれたときの十二支の年によって、その人の一生を、守護して貰われるという信仰がある。これは十二支の方位を表わすのと暦とが、あわさったものである。そして、その守り本尊によって、その人たちの性格の平均性もいわれている。

例えば、卯年生まれの人たちは、性質が温和で、社交性に富むなどというのがそれである。生まれ年と守り本尊を左に示してみると、

子 年生まれ	千手観音菩薩
丑寅年生まれ	虚空蔵菩薩
卯 年生まれ	文殊 菩薩
辰巳年生まれ	普賢 菩薩
午 年生まれ	勢至 菩薩
未申年生まれ	大日 如来
酉 年生まれ	不動明王
戌亥年生まれ	八幡菩薩（今は神格となる）。

今でもこの信仰は、ひろく信仰され、夫婦相性にも考えられるがそれは迷信といってもよいでないでしょうか。

六、仁王門に草鞋を奉納する

仁王は、神や仏を守護する夜叉神なので、顔は忿怒相として、堅固な身体に彫成され、いかにも守護神の剛勢さを感じしめる。

もとは、五穀豊穡・家内安全を祈願したのであるが、長い間には、仁王の剛健な姿勢に中心が移って、脚の痛い人、腰の痛い人たちが手製の草鞋するようになったり、「紙ツブテ」を痛いところに打ちつけて、快癒を祈る風習にも発展したものである。

七、七 福 神

正月や婚礼年祝などのときに、七福神の軸を掛ける。七は陽数でめでたいと考えたから、七人を選んだのである。これは江戸時代に確定した。この神神を崇めることによって、倅と長寿、生産、社交学芸などに恵まれ、所謂福を授けて下さると信じたためであろう。

この七福神について、概説をしておく。

① 大黒天 (発祥地・印度)

もとは仏法守護の摩訶迦羅で大黒と訳す。大日如来とも大自在天ともいって、もとは戦争の神であり、忿怒型三面六臂で頭骨を璽珞とし、蛇体のカツラとする異様なお姿であった。その後は厨房の神となり、七福神の第一の位置におかれるようになった。

日本では最澄がはじめて伝え、比叡山に祀ったが、本地垂迹説と大黒が大国主尊との語呂が似て、大国主尊と合致して、福ノ神の姿に換えられた。大黒が米俵に乗り、大福袋を左手で担ぎ、右手で打出の小槌をふりあげながら、微笑する親近感をもつようになったのは、後のことである。大黒の忿怒相もみることができる。福德円満、柔和慈愛を司る神で、京都悲田院外垣の大黒舞がはじまり、庶民も

商家も喜んでこれを迎えた。わが町では十二月十日には、大黒様の年取行事もあるが、節分の豆まきの唱えごとにも、大黒天を内に迎えたい心を表わしている。

② 恵美須 (恵美須夷発祥地・南方島嶼)

恵美須は、南方の海洋民族の信仰である。海をわたり漁民が日本に伝えたといわれている。海幸の恵美を与える神なので、風折烏帽子。狩衣に指貫をつけ、左脇下に鯛を、右手に釣竿を持った容姿になったのは、中世以後の世俗の尊修である。わが町にも、伊井諾尊の第三子とか、事代主命であると信じている人も多い。

生産神、特に水産守護神と信じられている。

③ 福祿寿 (発祥地・唐)

長頭短身で、杖頭に経巻を結び白鶴を伴っている。この経巻には、人間個々の寿命を記しており、寿昌を司る神として南極寿星の化身であるとも信じられてきた。

④ 布袋 (発祥地)

この神は、もと唐代の禅僧で、或は契此、布袋子とも呼んでいる。太鼓腹を出し常に破席を携え、杖で一布袋を担って供身用具をその中に収め貯えている。

後梁貞明二年に死んでいるが、非常に社会人を指導して尊ばれ、弥勒菩薩の化身であるといわれた。人生に赤裸々な正直さと、慈悲の大切なことを教え司る神である。

⑤ 弁財天 (発祥地・印度)

すぐれた弁舌で仏法を流布した女性で、大弁天・大弁功德天・美音天・弁天・妙音天などと書かれている。

頭に白蛇の宝冠、右に剣、左に宝珠、人臂で青色の蚕衣をつけて立っている。しかし座像のときは、左膝をたてた形で琵琶を弾じているものもある。弁財天は詠歌音楽を司祭する神であったが、日本に伝来して、寿命増益・怨敵退散、俗信では財宝満足・弁舌の上達を司る神と信じられ、立板に水の弁舌とか、流れるような弁舌とかが附会して、池水のはとりに祀られて水神といわれ、市杵島姫と混同されては、島に多く祀られた。各地の弁天島はそのためである。わが町でも江戸中期から、弁財天信仰が盛んであったらしく、各地に「巳待供養塔」がある。江戸幕藩体制下で、地区や農民が重い貢租にもかかわらず、弁天・巳待の碑をたてた背景を考えると、稲作耕作と水、生活と水の深いかわりあいを知ることができる。

⑥ 毘沙門天 (発祥地・印度)

日本では多聞天と約す。仏法を守護する四天王の一つで、北方守護の神である。印度の須弥山すみせんの第四級層に住して、可畏・天敬・衆帰の三城を有している。武装して腰をひねり、右手に矛こ、左手に塔を捧げている忿怒形である。

⑦ 寿老人 (発祥地・唐)

老人の形で、杖を持ち鹿を伴っている。これは鹿の字が鹿かともよむからである。

延命長寿を司る神で、福祿寿と同星であるといわれている。

八、山岳信仰

私達の祖先は、霊と神とを生活のはじめから実在するものとして信じてきた。それは、精神文化の未発達時代の一つの偉大な発見である。そしてまたそれは、自然発生的な全く素朴な信仰なのである。天地の境界をする高い山岳は、神の住み給う地であり、また祖霊(精霊)の安住の浄地と考えていた。周りの高い山々に、いろいろな神を祭るのは、日本人の特質であり、時には大和国三輪山のよう、山姿そのままを神と信仰したのでもわかる。

わが柳津町も、飯谷山に飯谷神を祭り、大岩山に愛宕神を祀ったのも、決して不自然なものではない。ましてや、会津盆地から眺められる飯豊山にも、磐梯山にも、厩山にも、また猫魔岳・大戸岳・博士山・明神岳など、すべて神々を祀って、豊作と生活の幸福を祈念したのである。平安初期からは、修験道が発達して、山の靈気により、法力を身につけようとする修験は、回峯行・瀧入行などの流行を積み、自己の霊と神の霊との融合した特異な法力をもつようになった。山伏(法印)がそれであり、わが町にも、こうした家が数戸もあるのは、当然なことなのである。

① 飯豊山

福島・山形・新潟三県境に聳える海拔二、一〇五メートルの山である。五大虚空蔵を本尊とする。飯豊明神(現・飯豊神社―主祭神大國主命)に、十五、六歳になると参拝する。この神詣をしないと、

地区では一人前とみななかったのである。いわばこの参拝は人生のうちの通過儀礼の一つなのである。地区の数人の同行者が決まると、旅籠屋に五・七日の間、家族と別火行をする。屋根に幣をたてて忌を示し、七・八月でも恰か綿入を着て、元結の首しめを掛け、朝・昼・夜と水垢離をとる。そして、心身潔斎が終わると先達に引率されて、馬などに乗り、山都町木曾の船場にゆき、小舟で阿賀川を渡り、それから徒歩で川入・御沢をすぎ、木ノ根坂を登る。このときは、白御衣・白脚絆・白足袋・白冠に莫座・管笠に金剛杖である。下・中・上の各、十五里をすぎ、剣ヶ峯・御秘所・草鞋塚・箸納子（八王子）をあいぎあいぎ登り、頂上の御本社で深々と祈願する。山の靈気を感じるのは、霧がわき、匍松があり、名の知れる高山の鳥の鳴声に接したときである。二度目参詣者は、大日岳（御西）まで、奥ノ宮まいりとしてゆくこともある。

参拝がすむと、帰路につき、一ノ木ムラまで下り、ここで一泊し翌朝また往路と同じくして帰宅する。このとき、ムラの子供への土産として、気多之宮ムラから、煎餅（色せんべい）を買って、入口で迎える子供へ播与する。

同行者が、飯豊本社参拝の前夜は、兄弟・近親者は、旅籠屋に集まり、「助垢離」をして、御山晴天と同行の安全祈願をする。帰った同行者は、旅支度を脱ぎ旅籠屋に集合、諸会計をすませ、一夜の籠行をつとめて帰宅し、屋根幣をとって、納めるのである。

尚、湯殿山（三山）参詣の御籠もこれと等しいので省く。

② 湯殿山参詣（奥まいり）

山形県鎮座の羽黒山・月山・湯殿山と三山を巡拝してくる。旅籠屋のことは省く。

多くは、羽黒山の合祀所で帰るが、健脚者は、月山神社に下降参拝して、帰宅する。湯殿山の御神体は大きな岩肌に、静かに流れ落ちる湯のお姿で宮はない。全く山岳信仰の象徴的な神である。

飯豊神社も、羽黒三山神社も、五穀豊穡を司宰する神であるために参詣するのである。この奥の三山詣は、代参制のところもある（今は両方とも少なくなつて、むしろレジャーとして、登山する人も多くなつた）。

九、二十三夜塔（八日講も全じ）

月待の祭である。この信仰者は「二十三夜講」を結んで、毎月二十三日の夜、定めた輪番の宿に一重を持参し、二十三夜月の出るのを待った、いわば修養行事・社交行事なのである。新月と満月の中間が八日、満月と新月の中間が二十三夜なのである。暦の持たない古い時代に、月の満虧によって、生活を規制していた名残である。

この二十三夜は、女性の集会であることが特徴である。集会した婦人は、月の出るまで、社会のニュースや生活の話に花を咲かせ、善根善果を知る社会教育であり、また連帯感を強める社交場でもあった。月の出を拝して、一夜を宿であかし、翌二十四日の朝は、地藏尊に参詣して帰宅した。心身清浄の忌み夜なので、男と同衾して

子供を孕むと、その子は将来必ず社会悪をするという信仰で、男に近づかなかった。

10、庚 申 講

十干十二支の庚・申が合致した六十日目毎の神祭である。諸説があつてさだかではないが、この日は特殊な禁忌をするのである。庚申の夜は、体内に住む三尸の虫（上尸・中尸・下尸）が、人の眠ったときに体内から抜け出して天に昇り、天帝に過去の罪禍を知らせると、生命を奪われるという信仰で、我が国に中古に伝わり、夜を徹して語りあい、酒食をともした。

庶民では、室町末期から庚申待、庚申講となつて流行した。申は猿に結びつけ、猿を神使とする山王神の信仰に転化し、近世中期になつて、六臂の青面金剛像の彫刻が生まれてきた。

また、講員はその年に「庚申待碑」などをたてることも多くなり、わが町では、二十基を越している。庚申はまた厄病除とか、悪魔除ともなり、正月の第一庚申日には、講中に「魔除札」を配るところもある。これは出入口の戸の裏に貼ると、そうしたものが入らないと信じていた。

また潔斎日なので、男は女を近づけぬため、一夜を講中であかした。この日に孕むと、盗人になる子が産まれるとおそれられた。また、婚礼もなるべく行わないこととした。

浄土真宗には、庚申塔はたてない（月光寺担下）。

二、巳 待 塔

これは、巳の日に弁財天（弁天）を祭る日である。三葉雜記の中に、「弁財天を巳巳に祭るを巳待という」とあるのでも知られる。

巳は水にも通じ、弁財天は、音楽の神、そして水の流すような弁護をするために、水の神と俗信された。そのため、水に非常に恵まれない土地、また水難に罹災した人々は「巳待供養」をして、荒魂を和魂にと祈りつづけてきた。弁財天は、七福神の中の紅一点の福神でもある。わが町にも、この供養碑が六基もある。

三、古 峯 ケ 原 講

栃木県古峯ケ原に鎮座する古峯神社信仰者の講である。御祭神は日本武尊で、尊が東国の蝦夷征伐の際、静岡県焼津の原で、賊に火攻めの際、草を薙ぎ火鎮をした故事によるのである。所謂「火よけ」の神で、愛宕神社の「火具土ノ神」と御神徳は似ている。

わが町は、この神社信仰以前は、「秋葉神社」の火の神そのまた以前は、金剛山（遠州）の火の神を信仰していた。いまでもこの信仰の遺風の碑が見える。

この神社は、はやくから「講の結成」に力を入れたため、信仰者の広域性と定着性がある。地区の代参者が毎年参詣して、「鎮火神符」を配っているのである。

二、山ノ神講

山ノ神、即ち「大山祇神」を祭る講で、各地区で行われている。山を生活の基盤とするわが町では、古くから信仰されてきた。二月十二日と十一月十二日（十二月十二日）に、大山祇神社か、当番の家に講員参集して、山ノ神を祭り、そのうち金品を出しあい、神酒の直会をして楽しむ。この日は、山仕事を休み、一切山に入ること忌んだのである。

この信仰は、山の神を醜女と考えたり、また木ノ花咲耶姫のような美人と考えたり、大山祇の国津神と考えるところなど非常にまちまちである。二月と十一月の十二日には、山ノ神が山中を隈なく遊行され、二月には山に木を植え、十二月にはその成長の木を数えられるので、山中でこの神に逢うと不幸になると、昔の人は一日休んだのである。山ノ神は、一ツ目小僧のお姿なので、十二日には、決して入山しなかったのである。また、山ノ神は田ノ神の神格も備えられている。

二月に田に降り、（サオリ）十一月収穫が経ると山へ帰られるともいわれた。その年の初山入りは、山シメを作り、そのシメに木炭・餅・昆布・田作などをはさんで、山ノ神の供物として、山ノ神社の木の枝にかけてくると、山仕事に怪我なく、山ノ幸を授けて貰えると思われたからで、まことに美しい信仰である。

一四、オシメサマ（オシンメイサマ）

他の地方では、「オシラサマ」ともいう。大正初期までこの信仰は続いていた。いつか消えてしまつて、今では知っている人も少ない。わが町では、ただ一組が龍蔵庵の船木キヨ子氏が保存してある。実に唯一の文化遺産なのである。この神は、遊行神なので、村々、家々を遊ばせて貰つて歩く。川の上流の桑木で、二岐の枝のところで切りとり、それを頭ににして、色々な細布を巻きつけて、男女夫婦の神姿とする。黒布はつけない。これを巫女が両手で一体づつ持ち呪文を唱えながら、頭痛の人には頭を、腰痛の人は腰などと、その人の苦悩のところを軽く叩いて遊ばせると、患部が治ると信じられて、一時流行した。

「オシメサマ」の最古のものは、慶長四年（一五九九）のものである。

一五、オワカサマ（イタコともいう）

巫女みこの一種で多くは女の人である。女の人には神憑りみよかけが容易なので、よく「オガミヤ」といわれる人がいた。神習教の信者で、熱心な人は、免許をとり有資格者となる人がいる。「オワカサマ」は、神に真剣に祈ると、神がのりうつり、死人の霊が呼出されて、生存者と談話ができる現象になる。河東村冬木沢の阿弥陀堂前には、「オワカサマ」がいて、七月朔日の祭礼の日にここへ行き、巫女を昇して今は

なき人と対話して、泣いて来たのである。七月一日を「泣きの朔日」というのは、これから言い伝えてきた。現在はみることができない。巫子は過去のことはいうまでもなく、未来の予言もできたのである。「イタコ」というのもこの別名である。

一六、屋敷神

わが町にも、各家々の信仰神を屋敷内に祭ってあるのを見かける。祭神は、バラエティに富んでいて一定しない。一番多いのは、稲荷で、通称屋敷稲荷といっている。祭神は、保食神うけもちのかみで食糧を司る神である。この神は、五穀豊穡を守る神で、農家では深い信仰がある。

そのほかは、祖神・氏神・水神などのものである。毎年二月初午の日は、屋敷稲荷に紅・白の旗をたて、赤飯・豆いり・油揚げなどを供えて祈る。氏神は村の鎮守祭と同時に祭ったり、水神は、水に関係あるときに祭る。江戸時代になると仏家の附説で、稲荷は狐におきかえられてしまったが、これは俗信である。

狐憑きつきなどといっているのは、狐のすばしこさのことと、その神の信仰者を定着させたり、ひろめたりするための手段であったという。

一七、建舞飾りと女性

建舞けんまい（または建前）は、柱立をいうのであるが、わが町では「棟上げ」の日をいう。昔は「柱立」と「棟上げ」が建築技術の進歩に

よって、一日で終わるようになってきた。

建築儀礼は、その進行につれて、いろいろな行事がある。そのうちで、「棟上げ」のときは、扇をつけて、さらに大きな弓をつくり、弦は白布一反、矢は弦を満に張って、鬼門にむけ、その飾りには、鏡・白粉・紅・櫛その他の婦人の用具を供える。そして五色の旗をたてる。この様子は、まことに新鮮味と爽快さがある。この女性用具飾りの伝承は、伝説の部に入れる。

昔の建築は、村の共同体として最重最大の行事で、同族は勿論、地区の総労働力を結集して行われた遺風が、いまでもみることができ。義理・人情などの連帯感も、こうした行事を基盤として、漸次発達したものである。そして扇は神を招きよせて祝い、弓矢は鬼門からの悪魔を打ちはらうものである。この「棟上げ」によって、家屋材の全重量の半分以上を使ったことの意味もふくまれている。

また、大黒柱は「棟持ち柱」とよび、大切なもので、お札をおさめたり、貼ったりして家の魂が入っている。

一八、民間信仰碑

野仏の心 ここに取り上げたものは、寺院の奥深く安置される本尊仏ではなく、風雨にさらされ路傍や墓地に立つ石仏・供養碑群である。それだけにいつでも、どこでも気軽に接することのできる庶民性がある。

山岳信仰としての湯殿山・飯豊山・鹿山等は全域に分布しその広

さがあり、また昭和年代においても極く稀ではあるが造成されているところから見ると、今も生きている民間信仰の根強さがうかがわれる。観音信仰は、比較的只見川沿岸にその分布が多く、その中でも特色のあるのは、おぼを抱く子安観音が多いのに驚かさぜられることから見ると、子どもに対する愛情や、その冥福を祈る厚い感情が漂っている。

旧道の草むらの中に、墓地の一隅に或は木立の峠に野仏を拜むと、慈悲の相、忿怒の相さとの相、微笑の相等異なる相によって現代に訴えていることは人々の心を各種の型によって教化してゆく石仏の心に接することができる。

数は少ないが、弁財天碑が見うけられる。即ち小柳津・下藤・門前町・十五町（おっこし）等地形的に見ても水害と密接な関係にあることがうなづける。山津浪の場所、河川の屈曲点などに供養碑が建っている点など見ると水に対する悩みや恩恵に対して供養する心がこの石碑の文字に刻みつけられている。

こうした碑や像はすべてが石材を使用している。然も大きいものは何トンもある巨石で、人力で山上まであげて祀ってあることを思うと、偉大なる民間信仰の力が我々に語りかけているような気がしてならない。こうして山野を歩き集録して見ると、偉大なる先人の力と信仰が我々に迫ってくる……。この意味においてすべてが町の歴史であり文化であることに気づくのである。現代人は文化財として、この野仏の心を残す責務を痛感する。



古峯神社(黒滝)



灯籠式六地藏尊(小巻)



おぼ抱き観音(早坂峠)



不動尊(寺家町・大清水)



地藏碑(軽井沢)



弁財天供養塔(一王町・追越)



鬼子母尊(藤)

子安観音(小柳津)→

水神様(大野・光泉寺)



勝軍地藏(麻生・愛宕神社)



延命地藏尊(藤)

←湯殿山供養塔(藤分校前)

民間信仰に関する碑および供養碑一覧表

名 称	建碑年次	場 所	名 称	建碑年次	場 所
庚申供養塔	明和九年	円蔵寺仁王門下	子育観音(おぼ抱き)	無 銘	諏訪町、諏訪神社境内
湯殿山	元治元年	円蔵寺仁王門下	金毘羅神社碑	昭和六年	瑞光寺公園
馬頭観世音(大龍号)	昭和十八年	円蔵寺仁王門下	石尊大権現	無 銘	瑞光寺公園
湯殿山	文政十三年	大平町	子育観音(おぼ抱き)	無 銘	早坂峠大野新田道
湯殿山供養塔	安永九年	安久津入口	つんば神(三基)	無 銘	国道、細越分岐点
厩山	無 銘	一王町入口	湯殿山	元治二年	細越(下原)
弁財天供養塔	享保十九年	一五町入口	飯豊山	無 銘	細越(下原)
巳待供養塔	明治三十二年	一王町入口	湯殿山	無 銘	細越(下原)
厩山	嘉永五年	一王町入口	延命地藏	無 銘	細越(下原)
馬頭観世音	文化九年	一王町入口	湯殿山	元治二年	八坂野
湯殿山	明治九年	一王町入口	延命地藏	無 銘	八坂野
馬頭観世音	文化九年	一王町入口	湯殿山供養碑	文化四年	藤分校地内
飯豊山	文明三年	一王町入口	厩山	慶應元年	藤分校地内
湯殿山	文政十一年	一王町入口	地藏尊	無 銘	藤分校地内
勝軍地藏(木彫)	無 銘	門前町愛宕神社	湯殿山	無 銘	藤分校地内
地藏尊(石像)	元禄九年	門前町愛宕神社	天満天神	無 銘	上藤
不動尊(石像)	無 銘	門前町糸滝	納経塔	嘉永三年	藤分校西街道
湯殿山	嘉永五年 八月一日	寺家町清水	地藏尊(石像)	文久元年	藤真光寺前

名称	建碑年次	場所	名称	建碑年次	場所
飯 豊 山	元治元年	上、中両藤中間	地藏尊(石像)	明治三十九年	軽井沢分校上
山神供養塔	文化十四年	藤新道入口	地藏尊(石碑)	嘉永二年	軽井沢分校入口
二十三夜供養塔	無銘	藤新道入口	聖観世音(石像)	無銘	軽井沢村上
馬頭観世音(石像)	明治二十年 四月八日	藤新道	湯 殿 山	元治元年	軽井沢宮ノ前
鬼子母尊神	慶応元年八月	下藤	湯 殿 山	安政三年 八月	軽井沢宮ノ前
南無妙法蓮華經	無銘	下藤	飯 豊 山	安政三年 十月	軽井沢宮ノ前
石 神	無銘	下藤	湯 殿 山	明治三年 八月吉日	軽井沢宮ノ前
弁財天供養	天文五年 九月一日	下藤、御稷神社	子育観音(おぼ抱き)	無銘	新村
巳 待 塔	天明二年 十月五日	下藤、御稷神社	十二所権現	享保七年	石生
山 神 社	天保三年	下藤、御稷神社	湯 殿 山	慶応二年	石生
子育観世音(おぼ抱き)	無銘	小柳津観音堂	子育観音(おぼ抱き)	文化十四年	石生
なで切地藏(石像)	無銘	小柳津	子育観音(おぼ抱き)	無銘	石神華蔵寺
湯 殿 山 供養	無銘	猪鼻	子育観音(おぼ抱き)	無銘	古屋敷
湯 殿 山	無銘	猪鼻	湯 殿 山 供養塔	寛政九年	古屋敷
巳 需 供養	明和三年	猪鼻	巳 待 供養塔	無銘	古屋敷
不動尊(石像)	無銘	黒滝入口	大日如来(石像)	無銘	長倉
水 神(祠)	無銘	大野	飯 豊 山 供養塔	天明五年	小巻、椿別れ道
地藏尊(灯籠式)	無銘	大野新田	湯 殿 山 供養塔	天明五年	小巻、椿別れ道
如意輪観音(石像)	昭和八年	軽井沢分校上	馬頭観世音	明治二十年	小巻、椿別れ道

名 称	建 碑 年 次	場 所	名 称	建 碑 年 次	場 所
馬 頭 観 世 音	慶 応 三 年	小 卷、椿 別 れ 道	如 意 輪 観 音 (石 像)	無 銘	石 坂 長 窪 間
馬 頭 観 世 音	明 治 三 十 九 年	小 卷、椿 別 れ 道	湯 殿 山	文 政 五 年	椿
馬 頭 観 世 音	昭 和 十 六 年	小 卷、椿 別 れ 道	已 待 供 養 塔	延 享 四 年	椿
地 蔵 尊 (灯 籠 式)	無 銘	小 卷	已 待 供 養 塔	元 治 四 年	椿
地 蔵 尊 (石 像)	無 銘	小 卷	飯 豊 山	文 政 二 年	椿
已 待 供 養 塔	昭 和 九 年	小 卷	子 育 観 音 (お ぼ 抱 き 二 体)	無 銘	椿
天 王 様	無 銘	小 卷	湯 殿 山	天 保 十 年	野 老 沢 薬 師 堂 裏
不 動 尊 (石 像)	無 銘	小 卷	湯 殿 山	天 明 元 年	野 老 沢 薬 師 堂 裏
湯 殿 山	慶 応 四 年	竜 蔵 庵	湯 殿 山	天 保 十 三 年	野 老 沢 薬 師 堂 裏
厩 山	明 治 十 五 年	竜 蔵 庵	湯 殿 山	不 詳	上 野 老 沢 稻 荷 神 社 裏
庚 申 供 養 塔	享 保 十 九 年	竜 蔵 庵	湯 殿 山 供 養	元 治 元 年	上 野 老 沢 稻 荷 神 社 裏
已 待 供 養 塔	昭 和 五 年	竜 蔵 庵	馬 頭 観 世 音 (石 像)	無 銘	上 野 老 沢 稻 荷 神 社 裏
子 育 観 音 (お ぼ 抱 き)	無 銘	竜 蔵 庵	不 動 尊 (石 像)	無 銘	野 老 沢
大 日 如 来 (石 像)	無 銘	竜 蔵 庵 (上 田)	上 人 塚 碑	無 銘	芝 倉
馬 頭 観 世 音	明 治 二 十 三 年	石 坂 長 窪 間	将 軍 地 蔵 (木 彫)	無 銘	麻 生
馬 頭 観 世 音	昭 和 十 二 年	石 坂 長 窪 間	オ イ セ 様	無 銘	麻 生
已 待 供 養 塔	安 永 六 年	石 坂 長 窪 間	子 育 観 音 (お ぼ 抱 き)	無 銘	出 倉 上
湯 殿 山 供 養 塔	寛 政 八 年	石 坂 長 窪 間	地 蔵 尊	無 銘	出 倉 上
庚 申 供 養 塔	無 銘	石 坂 長 窪 間	馬 頭 観 音 (石 像)	無 銘	小 野 川、古 屋 敷 間

天満天神(冨中)→



←湯殿山(冨中)



道しるべ地蔵(松ヶ下)



念佛供養(久保田)



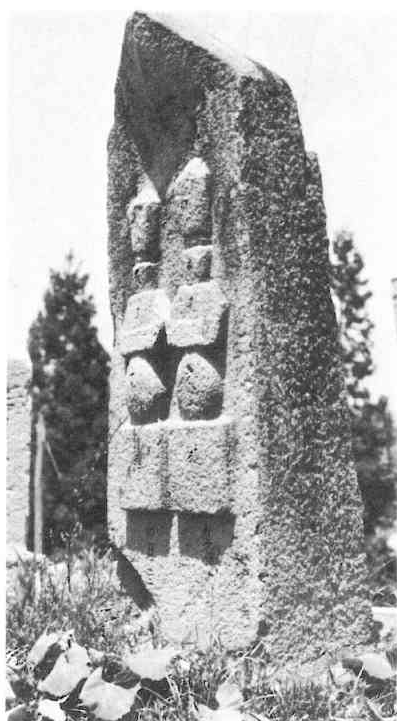
庚申石像(大峯)



廿三夜供養(牧沢)



道祖神(湯八木沢)



五輪双体塔(久保田) →

名 称	建碑年次	場 所
弁 天 供 養 塔 弁 財 天 供 養 塔 庚 申 供 養 塔 湯 殿 山 大 弁 財 天 供 養 日 月 兩 金 剛 供 養 月 山・羽 黒 山・湯 殿 山 日 月 奉 供 養	寛 延 三 年 元 文 三 年 寛 延 四 年 嘉 永 七 年 無 銘 延 宝 年 昭 和 四 十 一 年 無 銘	小 柳 津 八 坂 野 八 坂 野 八 坂 野 細 越 (上) 細 越 (上) 細 越 (上) 細 越 (上)
名 称	建碑年次	場 所
金 花 山 龍 蔵 権 現 天 王 様 (五 体) 三 体 銘 な し 湯 殿 山 廿 六 夜 供 養 庚 申 塔 奉 待 月 天 尊 地 蔵 尊 (石 像)	慶 応 二 年 文 政 五 年 安 政 三 年 嘉 永 五 年 安 永 四 年 万 延 元 年 延 享 五 年 銘 な し	細 越 (上) 砂 子 原 上 林 砂 子 原 上 林 砂 子 原 上 林 砂 子 原 居 平 砂 子 原 居 平 砂 子 原 居 平 砂 子 原 居 平



荒 神 碑(久保田)

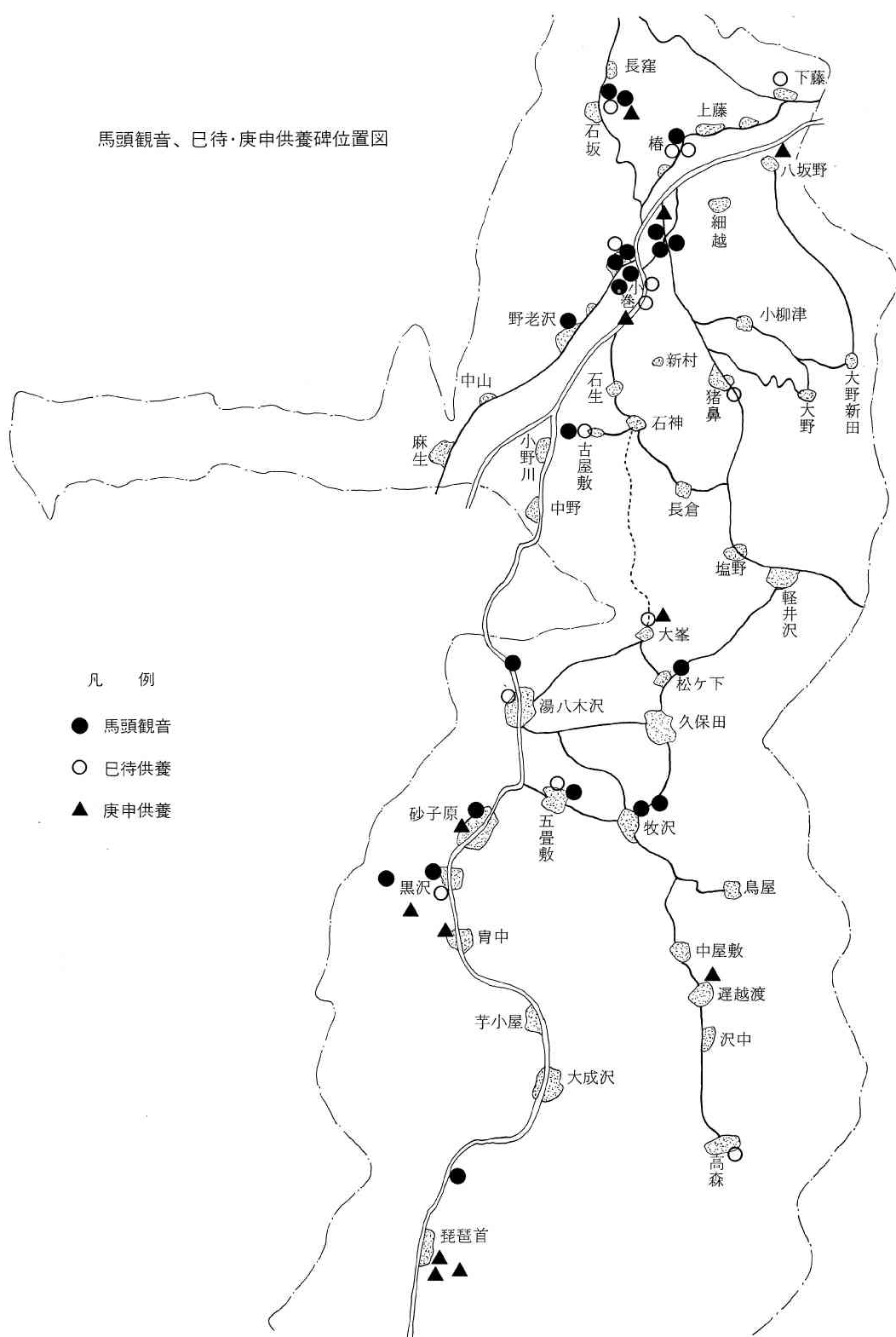


馬 頭 観 音(五疊敷)

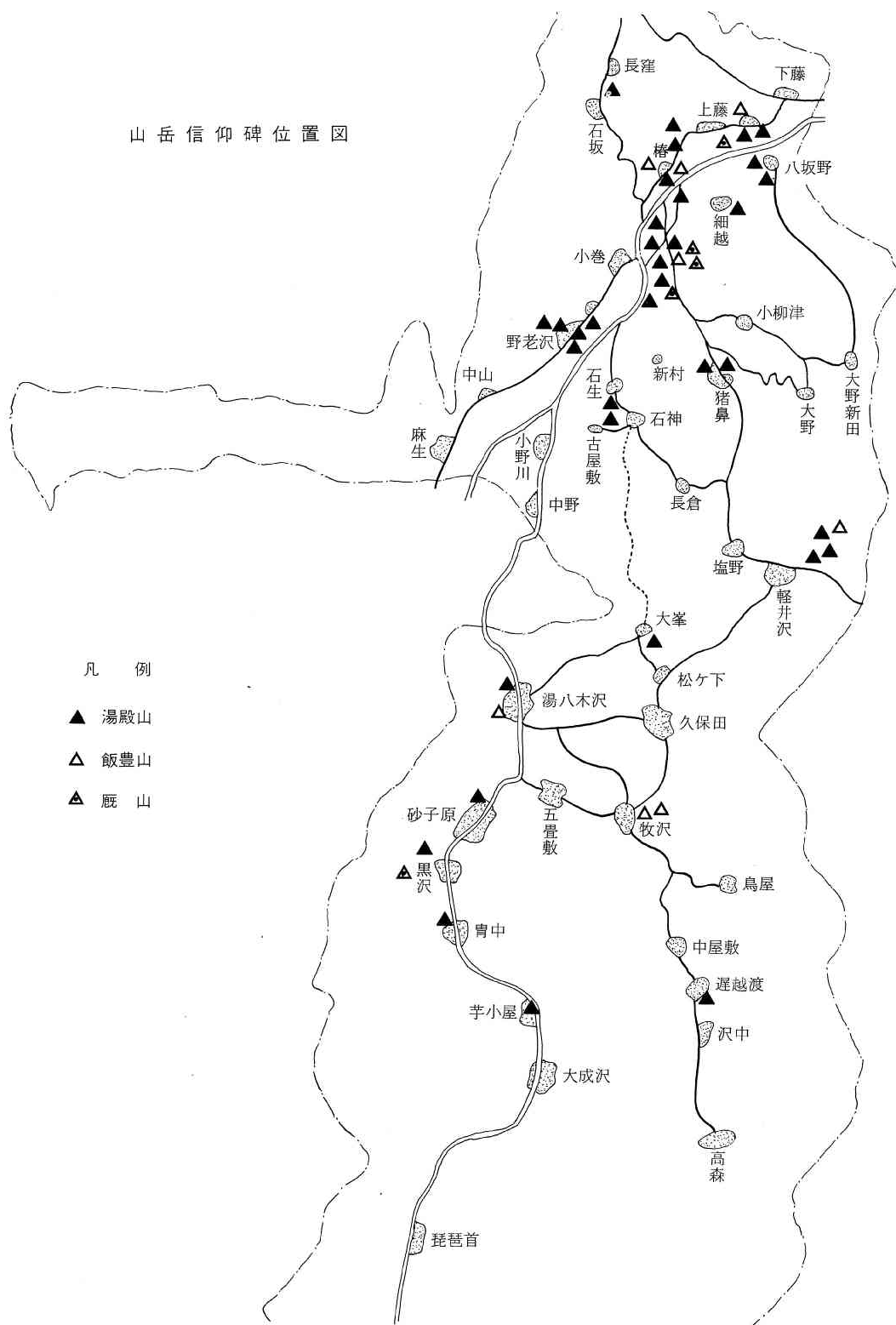
名 称	建碑年次	場 所	名 称	建碑年次	場 所
耳だれ神	銘なし	砂子原崖下	湯殿山	天保十一年九月吉日	遅越渡、善応寺
念佛供養塔	銘なし	砂子原崖下	庚申塔	文化四年六月吉日	遅越渡、善応寺
馬頭観世音	明治四十四年	砂子原居平	南無阿弥陀佛(板碑)	元文四年六月吉日	遅越渡、善応寺
不動尊	銘なし	砂子原居平	南無阿弥陀佛(板碑)	元文四年	遅越渡、善応寺
延命地藏尊	昭和四十九年	砂子原下湯	廿三夜供養	昭和九年十月	遅越渡、善応寺
二十六夜塔	寛延三年	砂子原神ノ湯	廿三夜講中	享保十九年九月吉日	高森
文殊菩薩	銘なし	砂子原小六平	已待供養塔	寛保二年	高森
馬頭観音	弘化四年八月十五日	五疊敷	湯殿山	嘉永六年四月八日	胄中
念佛供養塔	享保十六年七月十五日	五疊敷	庚申塔	嘉永六年六月八日	胄中
已待講供養塔	享保十年九月二十七日	五疊敷	天満宮		胄中
日天月天	宝暦三年	五疊敷	湯殿山供養	文化四年	芋小屋
廿三夜供養	天保七年九月二十三日	牧沢、猿沢寺	念佛供養塔	安永二年五月	大成沢
飯豊山	元治元年八月吉日	牧沢、猿沢寺	庚申供養塔	昭和七年中秋吉日	琵琶首
馬頭観音(石像)	無銘	牧沢、猿沢寺	庚申供養塔	安永三年五月三日	琵琶首
馬頭観音	無銘	牧沢、猿沢寺	庚申塔	文化九年六月吉日	琵琶首
飯豊山	無銘	牧沢、猿沢寺	子育観音(おぼ抱き)	無銘	琵琶首
十四佛塔	無銘	牧沢、猿沢寺	馬頭観音(磨崖)	無銘	琵琶首(ししおとし)
日天尊供養	寛延元年	牧沢	如意輪音	万延元年	中屋敷
金胎両部大日供養	寛保元年	牧沢	南無阿弥陀佛(板碑)	無銘	中屋敷

名 称	建碑年次	場 所	名 称	建碑年次	場 所
廿三夜供養塔	享保九年九月	大峯	荒神像	無銘	久保田
已待供養塔	享保十九年十月	大峯	五輪双体塔	享保銘	久保田
湯殿山	無銘	大峯	十佛塔	無銘	久保田(中村)
庚申塔(石像)	無銘	大峯	馬頭観音	無銘	湯八木沢、魔谷
牛頭天王	文政四年九月	大峯	不動尊(像)	不明	黒沢、前原
秋葉山	文政四年九月	大峯	不動尊(像)	明治五年四月八日	黒沢、前原
子安(石像、おぼき)	無銘	大峯	念佛供養碑	文化五年八月十五日	黒沢、薬師堂境内
道しるべ地藏	享保九年	松ヶ下	已待供養塔	宝暦三年九月吉日	黒沢、薬師堂境内
馬頭観音(石像)	文政八年	松ヶ下	廿六夜供養塔	安永二年九月	黒沢、薬師堂境内
念佛	無銘	湯八木沢	廿三夜供養塔	不 明	黒沢、薬師堂境内
飯豊山	安政三年八月吉日	湯八木沢	湯殿山	慶応二年七月	黒沢、薬師堂境内
湯殿山	嘉永六年五月	湯八木沢	厩山・馬頭観世音	文久二年	黒沢、薬師堂境内
已待供養之塔	享保十四年	湯八木沢	庚申供養塔	寛政四年	黒沢、薬師堂境内
無量寿覚	無銘	湯八木沢	大東妙典日本廻国供養	天明六年	黒沢、薬師堂境内
廿三夜月	元文元年辰	湯八木沢	不 動 尊	不 明	黒沢、民家宅地
念佛	延享元年六月	湯八木沢	お伊勢様	明治十六年	黒沢
道祖神(碑)	無銘	湯八木沢	御日待供養	不 明	黒沢赤城境内
念佛供養塔	無銘	久保田	オシメ様	不 明	黒沢、民家宅地
不動尊(石像)	無銘	久保田	馬頭観世音	不 明	黒沢、大谷林道

馬頭観音、巳待・庚申供養碑位置図



山岳信仰碑位置図



弁天供養、子安観音碑位置図

